iout to
out to
NSFW
18
DOJIN
FOR
ADULT
ONLY

今日和。中の人代表・Amelieです。この度はSABO-P+Aqua　Mortisの合同誌第2弾「O2CR -out of control RETURNS-」をお手に取って頂き誠にありがとうございます。いやはや、まさか「O2C」をシリーズ化することになろうとは去年の夏には夢にも思わず。今回は奇しくも織月さんと私、双方が「語学ネタ」をテーマにお互い作品を描く（書く）という偶然が重なり、本誌のキーワードは「言葉」と相成りました。英語も日本語も、難しいよね!!そんなわけで相変わらずなLAS厨二人がお届けするR18本ですが、前作よりも色んな意味で濃度高めにLASへの溢れんばかりの愛をギッチギチに詰め込んでみました（笑）。本作も皆様にお楽しみ頂けると幸いです。

2011年1月吉日　Amelie（編集担当）

……

……

……ジンジ…？

ISTENING

REA

My Sweet Tutor

Amelie

ほら とにかくコレ、英作しなさいよ

アタシも手伝うから

■STEP 3■
次の日本語を英語に訳しな

(1) 自分のことを英語で理

(2) 提出前にもう一

園につ

…っとなに？

『自分自身を英語で理解してもらうのは難しい…？』

はん、いかにも日本人が作ったらしい設問ね

まぁ、キモチ的にはそうなるけどね…

ひっくっ〜…

これは使役動詞を使えばいいのよ

ったく…じゃあねぇ…

はぁ

It is difficult for me to make myself understood in English.

…これでどうよ?!

どうよ…って言われても…よく解んないし…

んも〜…

…って何だっけ…？

使役…

makeとかhaveとかletとか、やったでしょ？覚えてないの？

…あんまり

READING

英語なんて使わないからさっぱりだよ…

ゴロン…

まぁ…ね

確かに日本にいる限りは使うことは皆無だわね

でしょ?!

ホラ キタコレッ!

食傷気味

…でも今はグローバルな時代なんだから

母国語だけにアグラかいてる場合じゃないわよ?

ほら、まだ他にもあるるわよ

うーん…

でも使役動詞って言われても正直違いがイマイチわからないんだよ

あっ

makeは強制的に何かをさせるって感じでhaveは依頼した相手に納得してもらって何かをしてもらうって感じかな

letは…そうね…

とんとん

させてあげる…っていうのか、許可を与える感じ…?

例えば?

も〜…そうねぇ…

そうね…簡単な例だと

Please let me know.

…で「知らせて下さい」って言えるかしら

ん〜…

むくっ

ねぇ…?

何…?

じゃあ僕が「アスカに触れさせて欲しい」…って思ったら

Please let me touch you.

——って言えばいい?

はぁ…??

ねぇアスカ…

僕、今すぐアスカに触れたい

え…?!

I want to touch you right now.

Can I …? (いい?)

ちょ…っ

どき

どき

let me kiss you... Asuka...?
(キスしていい?)

Let...

...あ...

あ…っ♡ヤダ…ぁ!
ちょっ…!
何してんのよバカぁっ!!
…英語の勉強…?
コレのドコが英語の勉強よっ!?
今、アスカが英語で僕を叱り付ければそれはそれで立派に英語の勉強になると思うよ?
あ…っ!や…ヤメ…ッ!
レロッ~
はう…っ
ひぁぁ…っ!

ぱしっ

か…っ
Cut it out!!!

…もしかして…
やめてって言った?

!?

うーん
でもね、
止まんないよ?

げひ

ハア!?

ちゅっ

あ…っ

アスカの肌、
柔らかくて
すべすべしてて…

そういや昔
感嘆文ってのも
習ったよね…?

何だっけ?
How…あ

How soft and smooth your skin is!

ほら、
どう?

Let me go!
(放してっ!!)

DON'T TOUCH ME!!

うわっ ヒドッ!

Thaaat's enough!!
(いーかげんにして!)

ん―? ゴメン 今、何言われたか解んないや…

はぁ?! んなワケないでしょ!

ウソ言うんじゃないわよ!

..Getting pissed off...!
(ムカつく…!)

…僕が分からないからって…

またなーんかオトナゲナイこと、今言ったでしょ…?

知らない知らないっ!

あう…っ♡

くちゅっ

でもさぁ…

!?

じゅぶっ

悪態つく割にはほら…

じゅぶっ

ココ、イイカンジになっちゃってるみたいだけど…？

じゅぶっ

じゅぶっ

ひゃうっ！

あ…っ!

合ってるかどうかなんて知らない!

いい加減にしてよ!

ヒクッ

アスカがそれじゃあ全然勉強にならないんだけど…?

も~…

ってゆーか! アンタもう全然やる気ないでしょ!?

ん?

ヤル気はあるよ…?

脱ごうか?

しれっ

アーホーッ

下半身のヤル気じゃないわよ バカ!

うーん… …じゃあさ

英語のオベンキョらしく

ココはヒトツ英語で言ってみようか?

は…!?

...I really wanna make love with you, Asuka...

(セックスしよ? アスカ…)

'cause I LOVE YOU...

(だって君のコト愛してるから…)

あ…っ

どきどき

ぷいっ!!

イイよね…？

ダメって言ったって…
どうせ聞いて
くれないんでしょ…

てゆーかもう
ほぼ脱皮状態
だと…

あ…っ
ダメ…っ！

アスカ
ココんトコが
スキでしょ…？

この膣の
奥んトコ…

ひ…っ
ああ…っ！

ねえ…？
キモチイイ…？

あ…っ♡

アスカ、敏感だもんね…
毎回最初は僕の指だけで
イッちゃうんだもん…

しゅぷぷっ

しゅぷぷっ

トロ…

あはぁ…っ！

それ…はっ…！
アンタがシツコク
いじるからでしょーが！
バカシンジ!!

でもヤメてって
言わないもん…

ぐっ

ほら、ガマンしな
いでいいんだよ？

言ったでしょ？
キモチヨクして
あげるって…

ヌプッ
ヌプッ

ぷるぷる

あぁ…っ
ダメ…っ！
ダメだってば…！

このままされたら
ホントにイッちゃう
から…っ！

いいじゃん？
僕、アスカのイッた顔
見たいな…

だからほら…っ
イッちゃえ…っ！

いやあああああっ!!

Oh〜!
Yeah〜

あえぎ声の
イメージらしい

ちょ…っ！
あんた、バカぁ!?
何言ってるのよ!!!!

そういや
外人だってセックス
するんだから

当然「イク」って
英語のフレーズも
あるんだよね…？

バカ…ッ！
バカバカ
バカぁぁぁ…っ!!

あれ？

あは…っ
アスカ、かわいい…

は…っ

バ…ッ

そんなに
悦かった…？

トロ〜

あ…アスカ…知ってるんだ…？

し…っ 知らないわよ！

いいじゃん 教えてよ…？

それに英語って ベッドで覚えるモンなんでしょ？

ベッドでなんか覚えないし そんな英語は 覚えなくてもいいの！

第二ココ、ベッドじゃない!!

も～… だからものの例え だってば…

ぬぎっ

――ねえ、アスカ…

…やっぱもう ムリ…限界… アスカん胎内… 挿入ってもいい …よね…？

シン…ジぃ…

メリメリ

く…っ

はぁああんっ！

あ…っ は…ぁ…っ

…ぜ…全部…入ったよ アスカ…？

動いて…いい…？

う…ん

あ…っ！ ヤバ…ッ！

アスカん膣内、キモチ悦すぎだってばぁ…っ！

あう…っ♡ やぁ…っ！

ちょっ！ アスカ…ッ！

ナカでそんなに締めたらヤバいって!!

パンッ パチュッ パンッ パチュッ パンッ

117

はぁ♡ だって…っ！ シンジのが悦すぎて…っ♡

はぁ♡

はぁ♡

ズプッ ズプッ ニュニュニュ ズプッ

も… ダメェ…ッ!!

ドカッ

――あ……

ひぁ…!?

な…っ ど、どうしたのよ…？

ねぇ…… アスカさぁ…

??

こんなイッてもいない
中途半端な状態で
セックス止めちゃったら

正直がっかり
するよねぇ…？

え…!?
な、ナンなのよ
突然…っ

やっぱ…
イキたいよねぇ…??

ぎゅっ

あ…っ?!

ねぇ…『イキたい』
って英語で
なんて言うの？

教えて…？

!?

な、なによ！
コンな状況で
何言ってんのよ！
あんた、バカぁ!?

だって
アスカ…

元々僕に英語教えて
くれてたんじゃない？

だ…っ！

だからって
この状況にした
のはどこの誰よ！

あれ…？いいの？

このままヤメちゃう??

!?

ああ…っ！

ちょ…っ

ほら…じれるよね…？ツライよねぇ…？昇りつめる直前で止められちゃってさぁ…

い…っイヤ…っ

くちゅっ

くちゅっ

くちゅっ

簡単なことだよ？

たったヒトコト、教えてくれたらいいんだから…

ぬちょ〜〜〜

い…っ
言わせないで
よぉ…っ!

A…
Abso-
lutely
YES…!
(き…決まってる
でしょっ!)

も…っ
もうイイでしょ…!?
お願い…挿入てエ…ッ!

シンジの…
ちょうだい…っ!

ズプッ

も!…
アスカ
エロ過ぎ
だって…

まぁ♡

まぁ

あ…っ♡

いいよ…
アスカ…

じゃあ…
I'll…
let you..
(イカせて
あげ…)

CUM
…!!
(る…っ!!)

はう…っ♥

ジュプッ

チュプッ

あぁんっ!
シンジ…ッ
シンジい…っ♡

あ…っ!
キモチイ…ッ
キモチイイ
よぉぉ…っ♡

パチュッ

パッ

パッ

パッ

パチュッ

僕…も…っ!
アスカん膣内…
気持ち悦い…っ

あ…っ!
シンジ…好き…っ!
スキぃ……っ!!

ズプッ

ズプッ

だから…アタシを
もっと愛して…っ!

僕も…
アスカのコト…
愛してる…

絶対に
離したりは
しないから…

ウレシ…イ…♡
シンジ…

アタシも…
アイシテル…

あ…っ♡

も…っダメェ…！
シンジい…っ！アタシ
イッちゃう…っ！
イッちゃうよぉぉ…っ!!

ズッ
ズッ
ズッ
ズッ

あ…っ！
僕ももうダメ…っ！
イ…キそ…っ！

ああああ…っ♡

ビクッ
ビクッ

う…
ああ…っ！

……

……どうしてコトだ…

やっぱり今度から英語はベッドで勉強しよう、アスカ！
ヤル気倍増！

ぱぁぁ…っ

あんたバカあ!?

ぐちゃ

これのどこが勉強になってるってえのよっ!?

うん、少なくともなんちゃら動詞の使いドコロは分かった気がする！

キュピーン！

全っ然分かってないわよバカシンジ…ッ！
いっぺん殺されたい…？

ブチッ

ひ…っ!?
真子…っ!?

ちょ…っ！
さっき散々好きだの愛してるだの言ってたクセに何だよソレ……っ!!

そ…っそんなコト忘れたわっ！

何それヒドイ…っ!!

いいからココに正座しなさいっっ!!

そんな2人の愛の同棲生活はまだまだ続く…

Thank you for reading!

あー、嫌だ嫌だ。男ってどーしてこう、しょうもない事考え付くのかしら！　どうせ文化祭で甘味屋をするなら女子の接客はメイド喫茶風にしよう、ですって?!　一人の馬鹿が言い出した事だとは言え、それに賛同する人もする人だわ。

「確かにメイド風接客だと物珍しさで人が集まるな。後なんてったってウチのクラスには絶好の素材が居るし！」

「べっぴんさんに接客してもらただけでも反応ちゃうさかいなぁ」

オマケにこんな演説ぶち上げながらアタシを見るし。シンジがそこで頷いてたら、アタシはきっとアイツの首を絞めてたと思う。

採決が取られて結果は物の見事に演説に乗せられた奴が予想以上に多かった訳で。委員長のヒカリも余り良い顔をしていないけれど、クラスの三分の二近くが賛成に回ったんじゃどうしようもない。結局帰宅したアタシの手には、レンタルのジャパニーズ・キモノ一式。キモノを着た事が無い事を知った相田が、キモノの動きを知った方が良いだろう、と主張したので借りる羽目になった。キモノの練習をする事は別にいい。それは甘味屋とやらをする事で、女子が全員着る事は判ってたから。でも、あのメイド喫茶風とやらの接客は気に入らない。アタシは嫌だ。日本式で見ず知らずの奴の世話なんて、一体どうすりゃいいのよ！

Crazy Blue　織月

部屋に戻って来てからも、何だか食事を摂る気すらしなくて、アタシはベッドの上から机の上に置かれた包みを眺めてた。キモノだ。学校の帰り、人数分のキモノを借りる手続きをするというヒカリに相田の奴は、アタシの分だけ直ぐに借りろ、と言い出した。家でキモノでの動作に慣れて来い、という事らしい。それ自体は別にアタシも問題無い。ただ、翌朝にアタシの大家であり保護者である同居人が首を出して来たのは誤算だった。

「聞いたわよ～、アスカぁ♪」

「……何、朝っぱらから」

「文化祭で着物着る事になったんだって？」

「何で知ってんのよ！」

「シンちゃんから」

「もうっ！　口が軽いんだからっ！」

アタシはこの女には知られたくなかった。何故なら、難題を纏める能力には優れていても、話が斜め上にすっ飛んでしまう可能性が大だからだ。問題が解決したとしても、その後に残る疲労感は何ともし難いし、出来る事なら遠慮したい。

「で？　何悩んでる訳？」

「何でよ？」

「着物の着方が判らないとかで悩んでるんじゃないんでしょ？　やっぱメイドさんかなぁ？」

「う～っ……」

そう、この女、ミサトはそういう所に関してだけは勘が良い。どんなに隠しても、自分が面白く楽しめそうな事だけにはやたらと鼻が利く。だから隠しても無駄なので、アタシは早々に手を上げるしかない。

「そうよ。キモノなんて着た事無いし。第一、日本式でなんてどうやってやれっつーのよ」

「また難しい事考えちゃったのねぇ。可愛くいらっしゃいませぇ～♡　って笑ってれば良いと思うけど？」

「それが出来れば苦労しないわよぉ……」

「ふぅ～ん……成程ぉ……シンちゃんにも中々笑えないのに、他の奴になんて笑ってたまるかー、って？」

――ミサトの奴ううっ！

ホントに鼻だけは利くんだから！　そう、アタシはシンジの前だけではどうにもこうにも上手く笑えないって言うか、喜怒哀楽表現がおかしい。嬉しくてもすぐ恥ずかしくなっちゃって、顰めっ面になっちゃう感じで上手く喋れなくなる。だからいつもいつも突っかかっちゃうって言うか……こんな事じゃ良くないのは解ってるんだけど上手くいかない。

「判ってるんなら一々口出さないでよね。アタシだってその辺解って悩んでるんだから」

「全く面倒だわねぇ。そんなに気になるなら、着物着たとこ見せてシンちゃん落としちゃえばいいのに」

「――っ！」

「ふむふむ……これがこーなって、あれがこーなって……ここがこーなるのか。簡単じゃなぁい♪」

アタシの事を無かったかの様に借りて来た包みを開けて中身を広げた後、ミサトは容易く言い切った。

「ねね、アスカ。試しにこれ着てシンちゃんに見せてみましょーよ？」

「……」

「アスカは土台が良いんだから、着物着たらきっとシンちゃんだって見惚れちゃうわよん？」

「……！　無理！　無理無理無理無理無理っ！　そんな事出来ないってば!!」

「何でよ？　可愛い姿見せたら、シンちゃんだってイチコロよ？」

「……キモノはやっぱり日本人が着てこそよ。クォータのアタシが似合う筈無いじゃない」

「そーかなぁ？　試しに着てみなさいよぉ。ほらほらほらぁ♪」

ミサトはアタシをベッドから立ち上がらせると姿見の前に立たせて、アタシの肩にキモノを掛けた。

「着物はねぇ、下着を着けちゃいけないの。さ、脱いだ脱いだ♪」

アタシはミサトに部屋着を引っ剥がされた後、ブラのホックを外された。

「ほら、それも脱がなきゃ♪」

「そんなっ、ショーツも?!」

「お尻のゴムの線が出ちゃうのよねぇ」

「……」

「ほらほら♪」

「……わっ、判ったわよ！」

アタシはキモノに関しては全くと言っていい程知らないので、ミサトの指示に従うしかない。ミサトはアタシの足に指先が二つに割れた靴下の様な物を履かせ、腰に長い布をグルグルと巻きつけた。その上から白いキモノをアタシに着せ、引き摺る長さを調節して腰の所で長い紐を掴び付けた。

「ねぇ、ミサト……日本式のメイドってどんなの？　アタシ、全く想像が付かないんだけど？」

思えば、アタシはミサトの提案に乗るべきではなかったし、質問もするべきではなかったのだ。そして、もっと注意深く彼女の表情を見ておくべきだった。

「いーい、アスカ？　日本のメイドは腰元とか女中って言ってね、御主人様の事は旦那様や上様って呼ぶのよ」

曰く、可愛い女中さんは旦那様から帯を解かれて、あ～れ～、とクルクル独楽の様に回される、だとか。曰く、旦那様に何かを要求する時は、お情けを頂戴しに参りました、と言うとか。曰く、お願いする時は三つ指を突くのが常識、だとか。

「……と、まぁ、色々とあるのよん♪」

「これって、シンジも知ってるの？」

「勿論。って言うか、日本人なら誰でも知ってる常識よ～」

困った。シンジも知ってるって事は、もしキモノ姿をシンジに見せた時、帯で回して貰えなかったとしたら。アタシ、シンジに可愛くないって思われてるって事ぉ?!

「ミつ、ミサトぉ……アタシっ、アタシっ……ううっ……」

「どっ、どうしたのよぉ！」

「シンジにっ、シンジにっ、うえぇぇぇぇっっ……！」

そう、アタシはまんまとミサトの術中にハマったのだ。

そして、ミサトの術中にハマったのはアタシだけでなく、何とシンジも一緒だった。ミサトに煽られた日常の中の非日常に侵蝕された結果、シンジはアタシを押し倒したからだ。

アタシはと言えば今、ミサトの言う通りにしたのにシンジから半分説教を食らってる。勿論、ミサトには厳重な罰を与える事はアタシ達の中で決定していた。そして即、ミサトが一番堪える罰を実行に移してある。あんなちゃらんぽらんな女、一回地獄を見ればいいんだ。

「だからね、ミサトさんが言ったのは時代劇での事で、現代じゃ普通ありえない事なんだよ。確かに着物を着たメイドみたいな人は居るけど、今は女中とか腰元なんて言わないの。あれは全部お芝居！　解った？　それに下着だって普通は着けるんだよ。着けてなかった事があったのは二次大戦が始まる前頃迄！」

「ミサトの奴……ややこしい事吹き込んでくれたわね……」

実際とは違うという事を聞いて、アタシは心底げんなりとしていた。お芝居の中の事をさも現実の常識の様に話していたミサトに、怒りを覚えるやら脱力するやらで、全く訳が解らない。

「確かにややこしいよ。昔は雇い主の事を旦那様って言ってたのは事実だし。それ以外にも意味があるしね」

「例えば？」

「仕える相手の事もだし、夫の事を言う事もあるよ。他にも男性を茶化して呼ぶ事だってある。一つで複数の意味なんだ」

「相手によって同じ言葉でも意味が違うって事？」

「うん。上様なんてのは仕える相手以外にも、請求書の請求先に使ったりもするよ。汎用性のある匿名扱いだね」

「……はぁ、奥が深いのね」

普段論文で使う英語だと、呼ぶ対象に拠って呼び方が変わってくる。日本語に訳すと全て同じ言葉なんて、一体どれだけあるんだろう？

「何？　そんなにこれって難しいの？」

「そりゃそうよ。今言っていた旦那様って要は御主人様の事でしょ？　主人って意味を持つ名詞だけでも幾つもあるわ」

「そうなんだ」

「更に名詞だけじゃなくて動詞もあるし……」

「へぇ。例えば？」

シンジはアタシの言葉に目を輝かせた。アタシはシンジに解りやすそうな言葉を一つ一つ説明する事にした。一応、ネルフに特例で勤務している扱いとは言え、今後どうなるか判らないものね。学習欲を伸ばして知識を増やしておくのは悪い事じゃない。

「そうね……英語で雇い主と言う意味の御主人様なら、employerね」

「他には？」

「宿の主人と言う意味でlandlord、夫という意味ならhusband。これは解るわよね？」

「うん。幾つもって事なら、それ以外にもあるって事だよね？」

「そうね……接待をする主人、つまりパーティの主催者の意味ならhostだわ」

「成程ね。じゃあ、メイドの場合はemployerが妥当なんだ。」

「そうなるわね」

「……だとすると、普通主人っていう意味のmasterはどうなるの？」

これは……日本語に訳すると名詞と動詞が複数ある筈。尤も、日本語の意味はアタシには一部しか解らない。

「シンジ、英和辞典ある？」

「あるよ」

「持って来て」

アタシはシンジに本棚から辞書を持って来させた。Mの項目のページをペラペラと捲り上げる。

「あった。masterの意味……主人以外にも随分あるのね」

「ホントだ。師匠、名人、先生……使い手に旦那……動詞だと使いこなすや極める以外にも按ずるって意味もあるのか」

「知ってた？　マスターテープのマスターはドイツ語ではoriginal、つまり原版って意味もあるのよ」

「そうなの？　originalって英語だと思ってた」

「他にもmisterと同じ意味のHerrにもなるわ」

「……僕、覚えられるかな？」

「やる気出せば大丈夫じゃない？　アンタの頭の出来は悪い訳じゃないもの」

シンジの母親のユイ博士はとても聡明な方だったと聞いている。父親の司令だって、ユイ博士程ではないものの優秀な成績を修めているらしいし。そんな両親から生まれたシンジなら、本気を出せばアタシと同等位の成績を出してもおかしくない。ううん、アタシなんて直ぐに追い抜いちゃうかも。

「じゃあ僕、少しずつ覚えてみようかな？」

「良いと思うわ。日本の大学って学部に拠ったらドイツ語が必要なんでしょ？」

「うん。やってみる」

アタシはパタン、と辞書を閉じた。それにしても……日本語って奥が深い。旦那様という言葉一つにしても、こんなに意味があるなんて。

――アタシの日本語能力もまだまだね。

思わず溜息が出てしまう。そんな時、シンジが零した疑問に時が止まった。

「あれ？　だとすると、メイドに対しての主人って言うのはemployerなら……masterに対しては何が該当するんだろう？」

「どうしてそんな事？」

「うん。日本語だと、対義語は客人。つまり主人の意味はhostかlandlordで対義語はguestになるんだ。でもmasterの意味での対義語はどうなのかなって思って」

とくん、と胸の鼓動が大きく頭に響いた。

「知りたい？」

「ん？　まぁ、ここまで来ちゃったら知りたいかな？」

どうしてだろう？　こんなに胸が高鳴るのは。勿論、良い意味で高鳴る訳ではない。何故なら余り良い意味の言葉を口にする訳ではないからだ。

「そうね……ある意味、masterの対義語としてはメイドというのは間違いではないけれど、正確ではないわ。この場合はservant、つまり使用人とすべきなの」

「そうなんだ」

「でも、使用人にも色々意味がある。これは解る？」

「うん」

シンジはアタシの手から辞典を受け取ると、Sのページを開きservantの項目を探している。

「servantの意味はそうね……従者や家来という意味で使われる事が多いわ」

「そうみたいだね」

シンジの目はservantの項目に注がれている。目まぐるしく動く眼。その視線が、一つの言葉に注がれる。

「……あぁ、こんな意味もあるんだ」

「そ。奴隷、slave……主人という意味ならownerでも間違いではないわね」

「持主、か」

嘗てのアメリカ南北戦争の時代迄、奴隷は人間扱いされなかった。この間その辺の事を世界史の授業でやった所だから、余りいい気はしなかったのが引き摺っていたのだと思う。

「でもさ」

「ん？」

シンジは辞典を閉じると、何か合点がいったかの様なスッキリした表情で口を開いた。

「何となくだけど、採決の時に賛成しなかった理由が解って納得出来たよ」

「あの時アンタが賛成しなかったのって、アタシがアンタを睨んでたからと思ってたけど？」

アタシはあの時、迂闊に鈴原と相田に唆されない様にシンジに睨みを効かせていた。だからてっきり、アタシの視線に固まって賛成しなかったのだと思っていた。

「それもあるけど……今日一日アスカを見て判ったんだ。他の奴には御主人様なんて言って欲しくないな、って」

「どうして？」

「だって、僕達付き合ってるんだよ？」

「ん……そうね」
「だったら、アスカは僕のものだ」

シンジはアタシの腰に掬ばれている紐だけでなく、その下に巻かれている布迄手を伸ばした。そして、整えられていたキモノを肌蹴る。その途端、耳障りのする言葉を口にした影響で高鳴っていた鼓動が更にスピードを上げた。呼吸が速くなり、浅い息を繰り返して口の中がカラカラに乾く。
「何よそれ……」
「ん？　何って、所有宣言」
アタシは思わずキモノに手を掛けたシンジの手を押さえ、肌蹴られたキモノを掻き抱き胸を隠そうとした。しかしシンジはその手を払い除け、アタシの両手首を片手で掴む。肌蹴られたキモノが肩を滑り、上半身が殆ど露になる。
「やっ……見ないでよぉ……」
熱の篭った眼差しが、アタシを射抜く。視線が心臓を鷲掴みにし、全身の筋肉を軋ませる。鼻からしていた筈なのに、アタシの呼吸は何時の間にか口からの浅く回数の多い呼吸になっていた。

「ばっ、馬鹿っ！　ジロジロ見るなぁ……」
アタシの手首を掴んでいるのと反対側の手が胸に伸びる。
「無理」
ブラを付けてないのが仇になる。シンジの手はアタシの胸を鷲掴みにし、少しだけ強く力を入れてアタシの肌に指を食い込ませた。指の隙間から僅かに食み出た肉が赤味を帯びているのが見える。
「……大きくなったなぁ。その内手に収まり切らなくなるね」
「そんな事言われても、アンタがおっきくしたんでしょう」
「大きくしてって言ったのは誰だっけ？」
「――っ、意地悪！」
そりゃ、アタシが頼んだのは確かだけど、いつまでも引っ張らなくたっていいと思う。

「んっ、もっ、ダメだってば……っ、あぁっ！」
アタシの胸を鷲掴みにしていた手は乳房を掴むのを止めた代わりに、今度は指で乳首を摘み上げた。少し力を入れて鷲掴みにしていた所為か、乳房には紅い手の跡が残っている状態で摘み上げている姿は少し異様に見える。
「何で？　僕のものなんだから、自由にしていい筈だよ？」
アタシの腕を掴んでいた手を放すと、その手をアタシの腰から背中に回し、シンジはアタシを抱きかかえた。そしてアタシの胸に吸い付いた。
「っ、いたっ、痛いっ、痛いってば！」
アタシの白い肌に紅い花弁の様な跡が一つ。キスマーク。
「ここも……ここも……」
シンジはアタシの胸から喉へ指を滑らせ、今度は首筋へと吸い付いた。
「つく……やっ、ダメっ、見えちゃう……っ、あンっ！」
首筋に吸い付き、肩に歯を立てながら、アタシの腰を支えていた手がアタシの腰を撫で上げる。歯を立てた跡を舌先で何度もシンジは舐った。腰を撫で上げていた手が徐々に背中へと伸び、指先が背筋の窪みをスッとなぞると、総毛立つ程全身に電気が走った。
「うんっ――」
「ここも……」
喉を撫で上げていた手はアタシの唇をなぞり、そのまま口の中へ指を差し込まれる。
「う……ん……ぅう……っ……ん――」
指はアタシの舌を押さえ込み、声が上手く発声出来ない様にしている。
「この声も、全部僕のものだ」
そうして言葉を封じられたアタシに掛けられたその声はとても研ぎ澄まされていて、それでいて熱が篭っていた。アタシの心臓はその声に鷲掴みにされ、心は魅入られてしまう。その途端、アタシの躰の奥がきゅうきゅうと締め上げられる様に痛みを訴えた。

「もっと早く……こうするべきだった……」
シンジはアタシの口から指を引き抜いた。そしてその指に絡まっていたアタシの唾液をアタシの頬で拭う。その間、視線はアタシの目から逸らす事は無かった。

シンジのその視線はアタシの正気を薄く剥いでいく。頭の芯で燻るものが沸き起こる。それは剥がされた正気を糧に増殖し、アタシの躰の隅々迄広がっていく。
「アタシが……そんなに欲しかったの……？」
「うん」
シンジはアタシをベッドの上に転がし、アタシの躰に纏わり付いたキモノと紐を剥ぎ取った。そしてアタシの躰の上に馬乗りになると、アタシの首に再び手を掛けた。
「おかしいよね。独り占めなんて生温いものじゃないんだ。多分、心の何処かで、殺したいって思ってる」
そう言いながら、シンジは無邪気に笑う。その笑みを見ていると、アタシにも伝染したみたいで、自然と笑みが零れて来てしまう。
「それだけ？」
「まさか。何処にも行けない様に、閉じ込めてしまいたい。あぁ、手足を鎖で繋いでしまうのもいいな」
「他には？」
「他の奴に目が行かない様に目隠しをして、僕以外の声が聞こえない様に耳を塞ぐ」
「それから？」
「誰かの名前なんか呼ばない様に口を塞ぐのもいいかも知れない」
「それだけでいいの？」
「いや、肝心な事を忘れてるよ。僕以外が判らなくなる様にしないと」
「どうやって？」
「そうだなぁ……」
シンジはアタシの喉の骨に沿って指を滑らせ、殊更に嬉しそうな笑みを浮かべる。そして常人なら考えもしない様な事をさらりと言ってのけた。
「気が狂う迄犯して壊してしまいたいな。僕を嫌ってもいいから、僕以外に反応しない様になって欲しい」

その言葉を聞いた時、アタシは燻るものが燃え上がるのを感じた。そしてその時アタシは思った。アタシも狂ってる、って。だってこういう関係になる前、アタシはシンジの事が欲しくて欲しくて堪らなかったもの。例え他意の無い日常の会話だとしても、他の女と話すだけで腹立たしかった。テレビだとしても他の女に視線が向けられるだけで、どうしてアタシを見てくれないのかと思った位嫉妬してた。それが今、シンジはアタシを壊してしまいたい位アタシが欲しいと言ってくれた。アタシの願いが叶ったも同然だ。だから、アタシは躊躇い無く口にする事が出来た。
「いいわ、シンジ。アンタのものになってあげる」
「アスカ……」
「一番最初に言わなかった？　アンタならOKの三連呼だって。だからアンタはアタシにどんな事でもしていいのよ」
「それって――」
「そ、アンタがアタシの御主人様って事。差し詰め、Ownerって所かしら」
アタシは喉に触れているシンジの手に自らの手を重ねた。
「怖く、ないの……？」
「どうして？　どうして好きな人を怖がらなくちゃいけないの？」
寧ろ、嬉しいのに。アタシを世界から切り離して、尚且つ壊してしまいたいだなんて、アタシの望みそのものだ。
「アタシもおかしいのよ、きっと。アンタがアタシのものにならないなら、アンタを殺してしまいたい位好きだから」
「……じゃあ僕達、二人共おかしいんだ」
「そうね。だから――」

「アタシを壊して、アタシを狂わせて」

シンジは喉に触れていた手でアタシの頬を

包み込み、背を今以上に丸めて屈み込みアタシの顔を覗きこむ。
「もう、後には戻らないからね」
優しいけれど、鋭利な刃物の様な声にぞくり、と肌が粟立つ。連鎖してじくじくと下腹部が疼く。アタシは疼きを抱えて、シンジの為すがまま身を任せた。

シンジはアタシの唇を奪った。それはキスと呼ぶには名ばかりで、とても乱暴で、一方的な暴力に近かった。噛み付く様に、浅く、深く。舌はヌメヌメと粘膜の上を這い、アタシの舌を絡め取りながら舐っていく。
「んっ、うう……っ、はぁっ、んぅ――」
疼きは静かに、そして確実にアタシの躰全体に波紋が拡がる様に全身を包み込む。そして躰の奥から溢れる熱。アタシの中のシンジを求める部分が目を覚ます。キスを続けながらシンジがアタシに覆い被さって来る頃には、アタシの口からは自然と嬌声が漏れていた。
「はぁ……うんっ……あふっ、んぁっ、あぁ……っ」
「ん……っ……もっと……もっと啼いて……声聴きたい……」
シンジの大きな手がアタシの柔らかい胸を鷲掴みにし、絞り上げては執拗に乳首を舐る。舌先で突き、舌の腹で押し潰し、口に含んでは飴玉の様に転がされ甘噛みされる。口に含まれていない方の乳首は指先でガラス球を転がす様に弄ばれている。
びくん、と大きく躰が震え、思わず腰が浮いてしまった。その時、下腹部の筋肉が硬直し波打つと、アタシの胎内も大きく波打ちとろりとしたものが伝い落ちる感覚がした。
「あぁ……」
多分、何度も胸を弄られている内に躰の中は準備が出来上がってしまったんだろう。それに気付いたのか、何時の間にかシンジの躰はアタシの胸から下半身へと移動していた。そしてアタシの腰を抱え上げ、脚を腹の方に押し付けてアタシの躰を二つ折りにしてしまった。

「やっ……！　そんなっ――」
「結構いい眺めなんじゃない？」
意識が半分融けたアタシの目の前に、アタシ自身が曝されている。
「どう？」
「どうって……言われても……」
まさかこんな形で目にするなんて思わなかった為か言葉が出ない。
「随分出来上がってるみたいだよね。それとも残ってたかな？」
「――っ！」
シンジの言葉通り、先の行為の名残があったのだろう。拭っておいたにもかかわらず、アタシのヴァギナからは溢れる蜜の中には精液が混ざっているのが見える。
「僕、今日は殆ど胸しか触ってないけど、凄く濡れてると思わない？」
「そんなの、判んないわよぉ……」
「自分の事なのに？」
そう言われると困る。しかし、アタシ自身が自分の躰を持て余しているのは事実だ。初めての時だって、シンジに身を任せるばかりで、気付いたら全てが終わっていた。勿論、それはアタシの意思に反した事ではなかったから、アタシとしては特に不満も無かった。この事で、アタシがどれだけ近付いてもするりと擦り抜けてしまっていたシンジの傍に居られるのだと判ったからだ。それからも何度か躰を重ねたけれど、アタシはシンジの腕の中に居られるのが嬉しくて、彼の躰に縋り付くのが精一杯。与えられる快楽を受け止めるだけで、頭の中は状況を処理し切れなかった。自分の躰の状態まで気に掛ける余裕なんて無い。それ以上に、シンジに抱かれているだけで幸せな為に、アタシの理性は夢現な状態に近かった筈。つまり、現実感に欠けていたという事だ。
「自分の事だからよ……」
アタシは曝け出されているもう一人のアタシから目を背ける。けれど、シンジはそれを許さなかった。
「目を逸らしちゃダメだよ。見るんだ」
残酷な言葉。

「それは……命令？」
「そうだね。そう思ってくれて構わないよ」
アタシは視線を下腹部に向けた。視界の端にチラチラと光が入る。それはヴァギナから溢れた蜜が部屋の明かりを乱反射させたものだった。そしていざ視界に入ってしまうと、逆に釘付けになってしまう。不思議。
「どうなってる？」
「どうって……濡れてるけど……」
「それだけ？」
「……」
「この状態じゃ上手く見えないんだよね。僕にも解る様に説明してよ」
軽口を叩く様にさらっと言いのけるシンジの声音が、アタシの躰に絡み付く。
「ねぇ、何処がどういう風になってるの？　教えて欲しいんだけどな」
その言葉を聞いて、僅かとは言え恐怖心が先に来る事が怖い。でも、拒めない。だって、シンジが怖いんじゃないんだもの。
「……言わなきゃダメ？」
「ダメ。さっき一度射精した所為か、あんまり興奮してないしさ。だから僕が興奮する様に説明してよ」
「……」
念の為に訊いてみたけれど、やっぱり命令は変わらない。
「そうね――」
アタシは普段と変わらないシンジの口調に誘われるままに口を開いた。引鉄を曳いた瞬間だ。アタシをアタシ自身の手で壊す。シンジの言葉で悟った瞬間に感じた恐怖心の大半の大元はそれだ。アタシはそれを自覚した事が恐ろしかったのだと思う。しかしそれと同時に、壊されていくアタシ自身を知りたいという好奇心も。だから躊躇いは無かった。
「……多分、一杯濡れてると思う」
「多分？」
「……一杯濡れてるの」
「何処が？」
「えっと……」
瞬時に日本語が出て来ない。
「何て言えばいいの……えっと……」

アタシが言葉に詰まっていると、シンジが助け舟を出してくれた。でもそれは更にアタシを壊す宣告に等しかった。
「日本語だと出て来ない？」
「う……」
「手を出して、自分で触ってみなよ」
アタシは誘われるままに手を伸ばした。柔らかい粘膜が零れた蜜に濡れててらてらと光っている。指で触れると思った以上に刺激が強く、思わず声が漏れてしまった。
「あぁ……」
「どう？」
「あっ、アタシ……やだ、そんな……」
下腹部の疼きが強くなる。まるで、躰の中にもう一つ心臓があるみたい。どくん、と脈打つのに合わせて、アタシ自身が、理性が壊れていく。肌がピリピリとするにつれて、肌も粘膜も紅色に染まっていくのがスローモーションの様に目に焼きつく。
「んっ、あぁっ……これっ、あぁ……っ！」
蜜に塗れた粘膜から指が滑り、クリトリスを掠めた。

――ダメ。

刺激が躰の奥にダイレクトに伝わる。きゅう、と子宮が収縮する。それに釣られてヴァギナの口も収縮しては開き、中から蜜がどろりと溢れ、ラヴィアに泡を残しながら腹に垂れ落ちていく。その様を見ていると、シンジがアタシのヴァギナをジッと見ている視線を痛い程感じる。

――あぁ、そうなんだ。

アタシが今しなければいけない事。それは、シンジを受け入れる準備。シンジを煽り、アタシ自身を煽り、アタシの手でアタシを壊す為に。それがどういう意味なのかも解ってしまうと、手の動きも口の動きもスムーズになる。多分シンジは、アタシの躰を「犯して」、アタシの心を「侵して」、アタシを「壊したい」んだと思う。なら、シンジのものであるアタシが

する事はたった二つだけ。

「……シンジ、見て」
「うん、見てるよ」
「もっとよく見て欲しいの」
アタシは両手をもう一人のアタシに添えた片手でラヴィアを大きく開き、もう片方の指で溢れる蜜をラヴィアとクリトリスに塗り付ける。快感を得る為でなく、ただ視覚的に煽る為に、指の動きは緩やかに。
「シンジ、いつも言うでしょ。アタシは直ぐ濡れるって」
「うん、そうだね」
「んっ、アタシっ、おかしいの。シンジと一緒だと、おかしくなっちゃうの……っ」
「何処が？」
「全部……はぁっ、全部よ……全身おかしくなるの」
ヴァギナから溢れるものが増えたのか、ラヴィアに触れる度に粘膜の抵抗感が薄れていく。
「だから、キスだけで濡れちゃうのっ、シンジが好きだから……おかしくなっちゃうのよ」
「僕の事好きなの？」
「っ……好きよ」
酷い告白。普段は上手く言えなくて、意識すると会話どころか顔を合わせる事すら侭ならないのに。他の人に嫉妬ばかりして、引っ叩いたり悪態吐いたりしてばかりなのに浅ましい姿を曝さないと出来ないなんて。
でも、指が止まらない。ヴァギナが収縮されては口を開く度に溢す蜜は段々と濃くなり、ラヴィアは充血して厚みを増し、クリトリスは膨らむ。溢れる蜜はラヴィアに添えられた指を伝い、手の甲や腕に光る筋を残す。
「でも僕、アスカを壊したいんだ。だから酷い事ばかりしちゃうよ？　優しくなんて出来ないけど、それでも好きなの？」
「あンっ、好き……っ、ううんっ、他の人は嫌なの、シンジじゃないと嫌ぁ……あぁ……っ」
膨らんで頭を出し切ったクリトリスを指先で転がす。爪先迄電流が走る様に快楽が伝わる。けれどそれだけじゃ足りなくて、ラヴィアの内側を擦り上げて、ヴァギナに指を差し入れる。
「んっ、んあっ、はうっ、あぁ……いっ、いい……きもちいいよぉ……だ、めぇ……あぁっ！」
アタシはラヴィアを広げていたもう片方の手も使ってラヴィアを擦り、掌をクリトリスに押し付けた。
「凄いね、アスカ。ぐちゃぐちゃになってる」
「だってぇ……っ、とまんないのっ、あぅ、あぁっ、これ、いい……っ」
「……もっと悦くしてあげるよ」
シンジはアタシを煽りながらそう言うと、アタシが訊き帰す前にヴァギナへとペニスをゆっくり挿し入れて来た。
「あ、あ、あ、あ、やっ、そんなっ、んぁ、あぁっ、やだっ、あ――!!」
手が添えられたまま挿入れられた為か、普段よりも伝わる熱量が大きいみたい。アタシの思考は瞬間ショートしてしまったみたいだ。でも視線だけはもう一人のアタシから逸らす事が出来なかった。だってシンジが、目を逸らすな、って言ったから。
「っ……相変わらずよく締まるな」
「はぁ……っ、あた、し……そんな……」
「締まるんだよ。痛い位ね。ほら、手、動かして」
「でも……」
「ほら」
アタシは言われるまま、再び手を動かした。今度は両の指でクリトリスを押し潰したり、挟み込んで捏ね上げたり、凡そ思い付く限りの方法で弄り続けた。シンジはシンジで、アタシのヴァギナを突いたり掻き回したりしてアタシを抉り続ける。
「くぅっ、それ、あぁっ、いい、いいの、あぁっ、もっとぉ！」
「はぁっ、あすかぁ、あすかぁ、うぁあっ……！」
「やっ……だめっ、おく、おくがっ……いっ、あああああぁぁぁっ!!」
昔の経験の名残だろうか。お互いの快楽の信号が一致したみたいで、ヴァギナの奥を擦り上げられる度に躰を走り抜ける感覚が二重に感じられて。鼓動のタイミングも呼吸のタイミングも、繋う空気すらも重なって。そのまま意識がぷつん、と途切れて――。

気付いたら、アタシ達はベッドの上で躰を折り重ねたまま絡み合っていた。
「……シンジ」
「アスカ……」
「アタシ達……」
「うん、多分気絶しちゃったんだと思うよ」
顔を上げ部屋を見渡すと、床にはキモノと腰に巻いていた長い布とシンジの服が散らばっていた。ベッドの上はベッドの上で、お互いが溢したものでシーツに染みが出来ている。
数分経って状況を把握すると、朧気に口走った内容が頭の中に蘇って来た。その内容の醜さと浅ましさに赤面してしまうと同時に、背筋に薄ら寒いものが走り抜ける。アタシはシンジが覚えていない事を期待しつつ、傍らで半身を起こしているシンジに訊いてみた。
「ね、ねぇ、シンジ……覚えてる……？」
「何を？」
「あの、その……」
アタシは即答出来なかった。一言で言えば、恥かしい。それも、セックスそのものより恥かしい事を言った気がする。アタシが答に詰まっていると、シンジはアタシを抱き起こしながら言った。
「あ、うん……覚えてる……」
「軽蔑した？」
「どうして？」
「だって、アタシ……」
「そんなの、お互い様だよ。僕だって酷い事言ってるし」
「でも――」
「言える事は、その場限りの言葉じゃないって事だよ。少なくとも、僕は取り消す気なんて無い」
シンジは宣言する様にアタシに告げると、アタシの肩に脱ぎ捨ててあったキモノを掛けてくれた。柔らかいコットンの感触。汗ばんだ肌に馴染むと同時に、少しずつ意識を現実に引き戻す。そして日常に戻った時の事を考えた途端、そのギャップから恐怖心が湧き上がる。
「そうじゃない……そうじゃないのよ。アタシ、怖いの。アタシ、本当に壊れてる」
「何が？」
「アタシ、嬉しかったの。シンジがアタシを壊したいって言った事」
「うん」
「シンジのものになれたのが、嬉しかったの」
「うん」
「でも、どうしてそう思ったのか意味が解ると、とても怖くなった」
アタシは両手で自分の肩を掻き抱き、ただ震える事しか出来ない。アタシ達が抱えているものは、とてもおぞましい事に気付いたからだ。
「アタシ――」
「言わなくていいよ。でも僕達、それを抱えて行かなきゃいけないのは解るよね？」
「ええ」
「引き返せないのも、判るよね？」
「気付いちゃったものね」
アタシはシンジに侵されて悦んでる。シンジはアタシを犯して悦んでた。その根底にあるものは、相手への独占欲。
恋はこの世で治す事の出来ない病とは言うけれど、アタシ達の間にあるものは恋なんだろうか。答は判らない。ただ言えるのは、アタシ達は互いの心を狂わせ壊しながら、躰を重ね続けるという事。支配者と被支配者の関係。それは誰にも止める事は出来ない。
「でもこういう関係って、どう言うんだろう？　少なくとも恋人同士ではあるけれど」
「さぁ？　ただ一つだけ言える事はあるわ。アタシから見たアンタは、アタシの『御主人様』という事よ」
Master？　Owner？　Husband？
それは想像にお任せするわ。

中の人、最後の悪あがきReturns

SIDE:Oritsuki http://aquamortis.com/

こんにちは、織月です。お手に取って下さいまして有難うございます。前回発行した「02C」は委託したらほぼ一週間で実質完売だったので、冬になり在庫無は不味いという事で今回新刊という事で発行した次第です（お買い上げ下さった方、本当に有難うございました）。

一応私達のスタンスとしては「ストーリーあってのエロ」という事ですが、何処まで有言実行出来たかはてさて。色々ネタはあるんですけど、今一何処でどう出せばいいのか悩んでたり。Web版との兼ね合いもあってちまちま考えながら書いてみたのですが如何な物でしょうか？

オフ版に関しましては一応二人共ミサトと同居のまま18歳になり、研究機関になったネルフの実験に時々協力している立場であります。何気に冬コミ頒布のPre版と前回「02C」とも繋がってたり。エヴァ本体には乗らないけれど、実験でたまにテストプラグには乗る感じ？時系列的には「02C」→Pre版とこの本がほぼ同時進行という感じでしょうか。**Pre版をお持ちの方がこの本を読むと、ちょっぴりお得な仕掛け**がしてあったり（笑）。そんなには居られないとは思いますが、お手元にある方は読み比べてニヨニヨして頂ければ。取り敢えず、web版は一応色々張った伏線やらを色々畳みつつ、gdgdながら好き勝手に書いているので、時系列を見ながら色々と妄想しつつニヨニヨお願いします。（あんな所があんな所の伏線に！とかとかとか）。何気にオフ版と繋がってる話もあったり（笑）。

正直、企画立て始めた辺りから家庭の事情&体調不良&冬コミ準備でgdgdしっ放しだったので、間に合った事が嬉しかったりやらほっとするやら。でも、**手に取って頂けた貴方に萌えて頂ければ一番嬉しい**です。

今後の予定は未定ではありますが、Amelie嬢のスケジュールと私の体調次第で運が良ければ夏にはお会い出来るかも知れないという事だけお知らせしときます。詳細はサイトもしくはツイッターやPixiv辺りでヨロ。Webは割と自分の体調で動けるんで、気が向いた時に書いて、気が向いた時に投下して更新みたいな。気紛れで済みません。結構天気で動いてます、動物並み（笑）。まぁ、程々にちまちまマイペースでやります。という訳で、**もし3冊目が出たら万々歳という事で一つ宜しくお願い致しますー。**

（織月）

SIDE:Amelie http://sabo-p.jpn.org/

Amelieです。ここまで根気強く読んで下さった皆様、誠にありがとうございます（涙）。思い返せば前回「02C」にて初めてR18マンガを描いたわけですが、何分私も初めてのコトで右も左も分からず、更にはまだ羞恥心の方が勝っていたこともあり、少々遠慮がちにくんずほぐれつを描いた覚えがあり…（遠い目）。しかも「無名の新人だし、滅多に売れることもなかろうて」と少々油断していたところへ、某書店様に委託した全数が実質販売期間1週間程で完売という恐ろしい経験をしまして…。織月さんも言うように、基本、"ストーリーありきでそこにえちぃシーンがついてくる"が私達のスタンスではあるのですが、それでも**サンプルで抜かれたページがえちぃシーンのほぼ大半**、みたいな状態だったため、正直申し訳ないやらなんやらで実はちょっと反省してました（苦笑）。そんなこともあって今回は単純な"増刷"と言う形ではなく、新たに作品を描くことで皆さんにご恩返しを、ということになり、この「02CR」の発行に至った訳です。そして**一応**、私の気持ち的には前回の3倍以上はえちぃシーンを盛ったつもりです（笑）。更に、冬コミにて頒布したPre版をお持ちの方はご存じかと思いますが、本編にプラスして**あんな妄想までしてました**サーセン。

それはさておき、相変わらずの注意書きみたいになってしまうのですが、私サイドのR18版の2人はEOE4年後の世界で同棲生活をし、エヴァにはもう乗っていないという設定です。アスカがインターフェースを頭に着けていないのもその設定故なのですが、実は私の中ではその理由ってのを既に1本マンガ用のネタとして持っているので、出来たら近々描きたいなぁと思っています。もちろんWebの全年齢公開で…。ただし「いつになるのかわからーん！」状態なので、誰か**時々お尻叩いて下さい。**でないと当分アップされることはないと思います…（お）

あと、今回英語をネタにしたものの、「02×03」の時と違い担任に確認出来るような内容じゃないから正直合ってる自信、ナイです（情けない）。英語得意な方、間違い見つけても責めないで下さい…所詮は英検2級レベル。

そんなワケで、次回もしお会い出来ることがあるとすれば恐らく夏コミの頃になるのではないかなと思いつつ、現在**「あめりのエロHPはもうゼロよ！」**な状態なため、本当に出るのかは正直不明という…。織月女史がやる気になって、あめりが覚醒すればあるいは、です。そんな状況ではありますが、**まかり間違えて第3弾が出た時は何卒ヒトツ**、というコトで…。

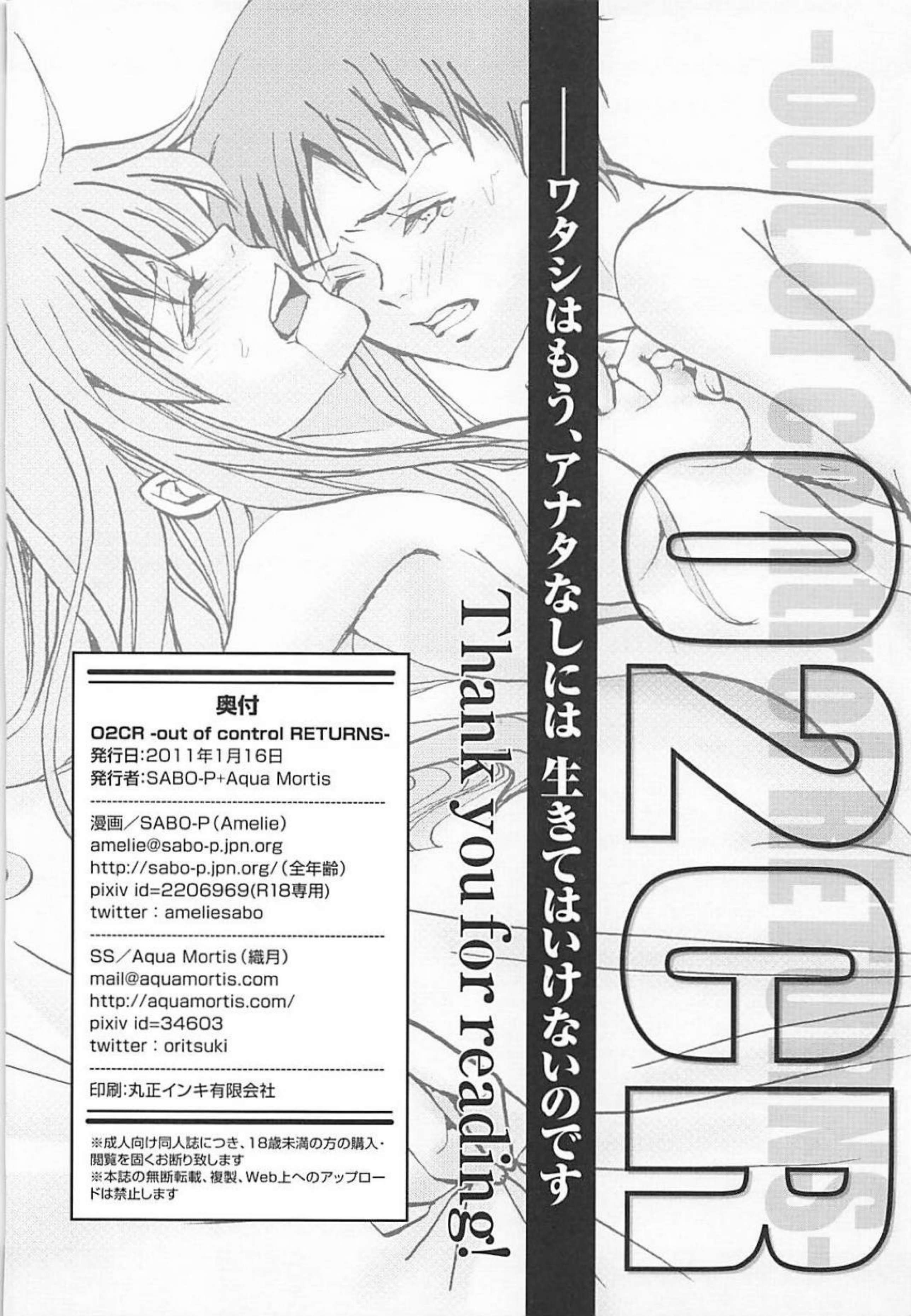
（Amelie）

既刊情報

02CR -out of control RETURNS- Pre ver.

「02CR」本編にてカットされた本誌未公開シーン（漫画）及び書き下ろしSSを収録。どちらも密かに本誌とリンクしているので、これを見れば違った視点で「02CR」が楽しめる…ハズ！

とらのあなにて DL販売予定



奥付

O2CR -out of control RETURNS-
発行日:2011年1月16日
発行者:SABO-P+Aqua Mortis

漫画／SABO-P（Amelie）
amelie@sabo-p.jpn.org
http://sabo-p.jpn.org/（全年齢）
pixiv id=2206969(R18専用)
twitter：ameliesabo

SS／Aqua Mortis（織月）
mail@aquamortis.com
http://aquamortis.com/
pixiv id=34603
twitter：oritsuki

印刷:丸正インキ有限会社

※成人向け同人誌につき、18歳未満の方の購入・閲覧を固くお断り致します
※本誌の無断転載、複製、Web上へのアップロードは禁止します

SABO-P+Aqua Mortis presents For fans of LAS people

EVANGELION FANBOOK 2011

Aqua Mortis/Oritsuki
http://aquamortis.com/

SABO-P/Amelie
http://sabo-p.jpn.org/